

読書を楽しむ！

岡田 芳治（化学生命工学科）

「死ぬほど読書」(丹羽宇一郎著、幻冬舎新書、2017年)の中で丹羽さんも述べているのですが、読書には『考える力、想像する力、感じる力、無尽蔵の知識や知恵……、読書はその人の知的好奇心、そして「生きていく力」を培ってくれます。』

だから、読書の楽しみ方は人それぞれで、たくさんあります。小説では、物語の世界に溶け込んで主人公と同化して、主人公になった気持ちになれます。ワクワクする気持ち、悔しい気持ち、悲しい気持ちなど物語の世界と同様に感じるができます。「君の臍臓を食べたい」(住野よる著、双葉社、2017年)では主人公の号泣シーンと一緒に泣いてしまいました。

それとは別の楽しみ方を私もしています。同じ「死ぬほど読書」の中にも書かれているのですが、丹羽さんは「印象的な言葉や興味深いデータについては、線を引いたり、付箋を貼ったり」しているそうです。私は心を奮い立たせてくれる言葉、励ましてくれる言葉、戒めてくれる言葉など心に残る言葉をその時に携帯電話のメモ帳に残すようにしています(すぐに忘れてしまうからですが)。後で若い人たちに紹介してあげようという思いからです。以下にいくつか好きな言葉を紹介しますので、読書ガイドにいただければ幸いです。宮下奈都さんと青山美智子さんの作品でまとめてみました。

1) 羊と鋼の森(宮下奈都著、文春文庫、2018年)

「努力していると思ってる努力は、元を取ろうとするから小さく収まってしまう。自分の頭で考えられる範囲内で回収しようとするから、努力は努力のままなのだ。それを努力と思わずにできるから、想像を超えて可能性が広がっていくんだと思う。」、「才能っていうのはさ、ものすごく好きだっていう気持ちなんじゃないか。どんなことがあっても、そこから離れられない執念とか、闘志とか、そういうものと似てる何か。俺はそう思うことにしてるよ。」

2) 静かな雨(宮下奈都著、文春文庫、2019年)

「あきらめ方を間違えると、ぜんぶだめにしちゃうの。あきらめることに慣れて、支配されて、そこから戻ってこられなくなるのね。」、「生まれてから今までの記憶。意識に上がるかどうかは関係なく、経験したぜんぶのことが人をかたちづくってると思う。それと、その人が生まれるまでにたどってきた祖先の記憶。それが受け継がれて人は生きていくんだって思うようになったな」

3) 木曜日にはココアを(青山美智子著、宝島社、2019年)

「思ったときに進まなければずっと止まったままで、それどころか、その願いは果たせないうちに気持ちごと消えていってしまうかもしれない。」

4) 猫のお告げは樹の下で(青山美智子著、宝島社、2018年)

「何かの答えを見出すのは素晴らしいことです。でも、そこにたどりつくまで迷いながら歩く日々のほうこそを人生と呼ぶんじゃないかと、わたしは思うんですけどね」、「なくすなよ、そのくやしいうって気持ち。大事に持ってる。くやし涙がでてるときって、でっかくなっている最中なんだからな」

本の中のどこに出てくるか、探しながら読書を楽しんでください。

読書っていろいろな人、言葉に出会えて楽しいですよ。



羊と鋼の森/宮下奈都
文春文庫 2018



静かな雨/宮下奈都
文春文庫 2019



木曜日にはココアを/青山美智子
宝島社 2019



猫のお告げは樹の下で/
青山美智子
宝島社 2018